

「教養教育の再構築とカリキュラム・ポリシー —『問う力』を育てる教養教育の実践—」

京都三大学教養教育研究・推進機構 教育 IR センター 特任准教授
児玉 英明

概要

日時

平成 25 年 7 月 26 日（金）
16 時～18 時

場所

京都府立大学
本館・合同講義室棟 2 階 第 1 会議室

講師

東谷 護 氏
（成城大学文芸学部
准教授、共通教育センター専担）

講師略歴

成城大学文芸学部准教授、共通教育研究センター
専担
京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程
修了
博士（人間・環境学）

【専攻】

- ・ポピュラー音楽研究
- ・現代日本文化論
- ・教養教育

【著書・論文】

- ・東谷 護『大学での学び方「思考」のレッスン』
勁草書房、2007 年
- ・東谷 護「初年次教育にみる論文指導を考える
—初年次用教科書を手がかりとして—」

『成城大学共通教育論集』1 号、2009 年

- ・東谷 護『進駐軍クラブから歌謡曲へ 戦後日本
ポピュラー音楽の黎明期』
みすず書房、2005 年

- ・東谷 護（編著）『ポピュラー音楽からみる日本
文化』
近刊

講演要旨（東谷 護）

日本の高等教育の変化は、この 20 年余りで、
国立大学の教養部解体、大学院重点化、国立大学
の独立行政法人化といった制度にかかわるものに
見られた。同様に、高等教育の「現場」に集う学
生にも、変化は顕著に見られた。2000 年代後半
には、大学への進学率は 55 パーセントを超え、
内実はゆとり教育を背景とした学生の学力低下な
ど、これまでの大学での教育では、立ちゆかなくな
ってきているのが現状と言える。それ故に、教
育の質の保証が大学に求められ、日本の高等教育
の歴史のなかで、これまでにないほどの教育改革
が多くの大学においてなされつつある。

大学での教育改革のひとつに、初年次教育があ
る。初年次教育の多くは、教養科目とは別個に、
新入生に対して、大学での学び方を「教える」導
入科目の意味合いを持っている。

本報告では、初年次教育に焦点をあて、日本の
初年次教育の変遷と、多くの大学の初年次教育の
失敗の起点がどこにあったかを明示した上で、解
決策の一助として、「問う力」を鍵語とした報告
者の教育実践例を紹介し、教養教育のカリキュラ
ム構築とその運用に僅かでも貢献できるようにし
たい。

第2回公開研究会での論点 (児玉 英明)

東谷の分析によれば、1991年の大学設置基準の大綱化後、教養教育の再構築をめぐる動きには、二つの段階があったという。第一に、東京大学教養学部教員が主導した、教養教育のための教科書開発である。例えば、小林康夫・船曳建夫編『知の技法』東京大学出版会、1994年や、東京大学教養学部英語教室編『The Universe of English』東京大学出版会、1993年が挙げられる。第二に、基礎学力に不安を覚える学生のために、ノートの取り方やパソコンの使い方といったスタンディ・スキルを教えることを目的としたテキストの開発である。例えば、学習技術研究会編『知へのステップ』くろしお出版、2002年が挙げられる。慶應義塾大学のような難関大学においても、佐藤望編『アカデミック・スキルズ—大学生のための知的技法入門』慶應義塾大学出版会、2006年が出版されている。

教養教育の担当者が、学生の学力低下という現実を目の当たりにし、様々な大学で教養教育改革が進んでいる。「受け入れた学生の教育に責任をもつ」という点では、自ら教材開発に乗り出している大学や教員は、かなり良心的である。しかし、教養教育を初年次教育として再構築する、または教養教育をリメディアル教育として再構築しようとすると、そこに出てくるプログラムは、学問の文脈から切り離された形で、「図書館の使い方」や「ノートの取り方」といったスキル教育を前面に出したテキストが多く見受けられる。

学問の文脈から切り離されたスキル教育として教養教育を再構築しようという動きに対して、東谷は警鐘を鳴らしている。東谷は「学問において

重要なことは『問う』という姿勢』だという。「自らの問いを自らの手で調べ、考察し、論文（レポート）という表現手段を用いて、他者に自身の考えを論理的に述べること」が学問では重要だという。

ユニバーサル段階を迎え、多様な学力の学生が入学してきている。そして、学生像の変容に応じて、教養教育も変わることを求められているが、「問う」とか「書く」といった行為を中心に据えたカリキュラム・ポリシーが、教養教育として初年次教育やリメディアル教育を展開するときのポイントになってくるのだろう。つまり、教養教育の古き良き伝統を守りつつも、学生像の多様化や学力低下に向き合うならば、「問う」とか「書く」といった行為に焦点をあてた教材の開発や授業の工夫に、可能性が開けている。「問う」とか「書く」という行為を、教養教育のカリキュラム・ポリシーに明確に据えることが、時代が求める新たな教養教育の一要素になるかもしれない。

